Osaka University Knowledge Archive

| | |
|---|---|
| Title | フランク･ロイド･ライトのテキスタイル・ブロック住宅の空間構成 |
| Author(s) | 末包, 伸吾 |
| Citation | デザイン理論. 2008, 52, p. 63-77 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://doi.org/10.18910/53429 |
| rights | |
| Note | |

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

# フランク・ロイド・ライトの<br>テキスタイル・ブロック住宅の空間構成

末　包　伸　吾
神戸大学大学院

キーワード
フランク・ロイド・ライト，テキスタイル・ブロック，独立住宅，
空間構成，ロサンゼルス近代建築
Frank Lloyd Wright, Textile Block, Residential Building,
Spatial Composition, Modern Architecture in Los Angeles

１．はじめに：研究の対象と背景および方法
２．テキスタイル・ブロックとテキスタイル・ブロック住宅
３．テキスタイル・ブロック住宅の空間構成
４．プレーリー・ハウスおよびユーソニアン・ハウスの空間構成との比較検討
５．まとめ

## １．はじめに：研究の対象と背景および方法

本稿は，ロサンゼルスにおける第１次から第２次世界大戦後にいたる近代建築の形成と発展過程を，空間構成に着目した分析により明らかにする研究の一部をなすものである。本稿では，フランク・ロイド・ライト（Frank Lloyd Wright 1867-1959，以下，ライト）が1920年代にロサンゼルスに実現させた住宅の空間構成の特性について，ルドルフ・シンドラー，リチャード・ノイトラ，ケース・スタディ・ハウスなどのロサンゼルス近代建築の空間構成の特性[1]を導いたものと同様の方法により把握する。

ライトは70年に及ぶ建築家としての長い活動を展開した多作の建築家であるが，彼の活動は大きく３期に分けられる[2]。1890年代から1910年ころまでのロビー邸をはじめとするプレーリー・ハウスを展開する第一黄金期，1936年の落水荘以降のユーソニアン・ハウスを展開する第二黄金期。この間に約四半世紀に及ぶ「失われた時代[3]」とも称され，彼のスキャンダルなどから作品が極端に少なくなる時期がある。この時期のライトは，アメリカからドイツと日本に「逃避[4]」し，ドイツでは1910年にヴァスムート社から作品集を出版し，わが国では帝国ホテル（1915，19）や山邑邸（1918），自由学園（1921）などを実現する他，ロサンゼルスではバーンスダール（Barnsdall）邸（1917，20），ミラード（Millard）邸（1923），ストーラー（Storer）邸（1923），フリーマン（Freeman）邸（1923），エニス（Ennis）邸（1923）

を実現するが，これらの作品が「失われた時代」の主たるものとなる。ライトが，「私は，ラ・ミニアチューラ（ミラード邸の別称）で実験を始めた。ブロックの間に蜘蛛が巣を張るように鉄筋を廻らせ，ブロックを組み立てた後，中核にセメントを流し込んで鉄筋をブロックと合体させる。有機的建築の一つの様相[5]」と述べるように，ミラード邸，ストーラー邸，フリーマン邸，エニス邸はテキスタイル・ブロック（Textile Block）と呼ばれる，ブロックを成型する型枠を加工し，その表面にライト流の直線を基調とする幾何学的な装飾が施されたコンクリート・ブロックを構造とする住宅であり，同構造の建築でロサンゼルスに建設されたものは，これら４作品[6]にとどまる。先の言説にみるとおり，ライトは終生に渡り追求した有機的建築の展開の一つとしてコンクリート・ブロック造の住宅を位置づけているものの，「失われた時代」のしかも４作品という作品数の少なさもあり，プレーリー・ハウスやユーソニアン・ハウスといった第一・第二黄金期を形成する作品群に比べると十分な分析がなされてきたとは言えない。特にテキスタイル・ブロック住宅に関する言及の多くが，コンクリート・ブロックに，ライト流の幾何学的な装飾を加え，全体としてマヤ的とも称されるマッシブな形態を採っていることを指摘するにとどまっており，その空間構成の特質は十分に明らかにはされていないと考えられる。こうした背景のもと，テキスタイル・ブロック住宅を対象に現地調査[7]を行い，さらにロサンゼルスのゲッティ・センターやアリゾナのライト・ファウンデーションより入手したテキスタイル・ブロック住宅の153枚に及ぶ実施図面を１次資料とし，平・立・断面図，展開図，立体構成図等を作成し２次資料とした。それらをもとに，空間構成材，モデュールによる空間の統御と軸の構成，配置計画や公・私室の構成などの平面構成，そして居間空間の構成や全体の立体構成などの分析の指標に基づいて分析図を作成し考察を行った。

図１　テキスタイル・ブロック
（フリーマン邸）

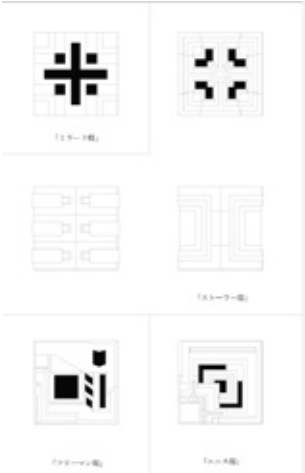


図２　４住宅のテキスタイル・ブロックのパターン

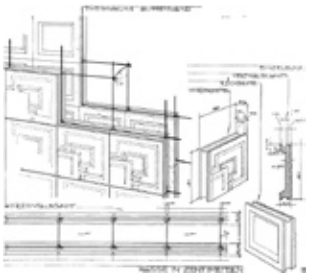


図３　テキスタイル・ブロック詳細
（ストーラー邸）

## ２．テキスタイル・ブロックとテキスタイル・ブロック住宅

### ２－１．テキスタイル・ブロック（図１～３）

ライトによるコンクリート・ブロック造の住宅は1906年の

ハリー・ブラウン邸に始まるが，それは装飾のない直方体のブロックを積層させたものであった。その後，帝国ホテルでは大谷石に装飾彫りがなされ，バーンスダール邸ではコンクリートで「ホリホック（立葵）」の文様が壁面に付加される。ミラード邸にはじまる４住宅が，構造体としてのコンクリート・ブロックにライト流の装飾彫りがなされたテキスタイル・ブロックによる住宅であり，その意匠は住宅ごとに独自のものが用いられている。テキスタイル・ブロックは，敷地の土を混ぜたコンクリートを型枠に流し込むものである。全て現場で製作されたもので，16インチ四方で厚さ3.5インチのコンクリート・ブロックを並べて厚さ８インチの二重壁を構成し，壁体内に設けられた溝に約1／4インチの異形鉄筋を挿入した上にモルタルを充填する[8]ことで一枚の壁体を成すように企図したものである。

図４　ミラード邸外観

図５　ミラード邸居間内観

図６　ストーラー邸外観

図７　ストーラー邸居間内観

２－２．テキスタイル・ブロック住宅

１）ミラード邸（図４・５）：ロサンゼルス近郊パサディナに建設されたテキスタイル・ブロック住宅の最初の作品である。敷地は道路側から渓谷側に徐々に低くなる傾斜地にあり，アプローチのレベルを主階とし玄関とリビングと客用寝室を配している。主階から１階下がったレベルは渓谷に接するレベルであり，渓谷に面して食堂が配され，キッチン・女中室が道路側に配されている。主階から１階上がったレベルには，居間の上部吹抜と道路側に面して主寝室が設けられているが，この主寝室は２層に渡っており，上のレベルでは渓谷側に大きく開く屋上のテラスとなっている。

２）ストーラー邸（図６・７）：南にハリウッドを臨む山麓部の斜面地に立地する。南側の道路から約２階分上がったレベルを主階とし，南北に開いた食堂を中心に，東側にキッチン，女中室，駐車場が配されている。西側は，食堂と半階ずれるスキップ・フロアとして，寝室群が配され，食堂の上階には四方に開いた居間が配されている。

３）フリーマン邸（図８・９）：ストーラー邸と同様，南に

ハリウッドを臨む急勾配の斜面地に立地する。この住宅は北側で接道し，このレベルが主階となり，玄関，居間，キッチン，そして駐車場が配されている。下階のレベルでは２つの寝室が大きなテラスとともに設けられている。また，ロッジアによって駐車場下部のサービス空間へとつながっている。

４）エニス邸（図10・11）：テキスタイル・ブロック住宅中，最も規模の大きい住宅であり，グリフィス公園南方の小高い丘の頂部に位置し，ロサンゼルスの大都市圏を一望する敷地に建つ。北側の道路からオーバーブリッジとなったゲートをくぐると駐車場を兼ねたエントリー・コートへとつながり，玄関へといたる。玄関から半階上がったレベルが主階であり，ここに食堂と居間を中心に，キッチン，客用寝室，寝室，そして長いロッジアを通った先に主寝室が配されている。

図８　フリーマン邸外観

図９　フリーマン邸居間内観

図10　エニス邸外観

図11　エニス邸居間内観

## ３．テキスタイル・ブロック住宅の空間構成

### ３－１．空間構成材[9]

空間を構成する構造体や，主室である居間の天井や壁，床の主な仕上げを本稿では空間構成材とする。構造体となるテキスタイル・ブロックが，いずれの住宅においても用いられていることは当然であるが，同時にブロックの特性を活かし，内外の壁をそのまま構成していることが確認された。各住宅の居間の天井は，ブロックの構造を繋ぐ構造である木の梁が，内部にそのまま現れ，同材で仕上げが施されていることが主であるが，エニス邸では，ニッチ状の部分などでは，テキスタイル・ブロックが用いられている場合がある。ついで床の仕上げについては，ミラード邸の居間ではセメント・タイルが用いられ，それが居間に連続して設けられたテラスにも用いられている。ストーラー邸では，木材の床仕上げが大半を占めているが，開口部の周りには部分的にセメント・タイルが用いられ，居間とテラスの仕上げの連続性を創出しようとしており，フリーマン邸では，木材を主にしながら，外周部にはセメント・タイルが用いられ，居間とテラスの仕上げのより強い連続性が創出されている。エニス邸では，居間の全体に木材が用いられ

ており，テラスとの仕上げの連続性は認められない。

### ３－２．モデュールによる空間の統御と軸の構成（図12）

ここでは４題の住宅の平面・断面構成をモデュールに着目した分析図により。モデュールとともに軸による空間の統制に関する考察を行う。図の平・断面のグリッドは４フィート，立面のラインは16インチである。

**１）平面および断面構成におけるモデュール**：テキスタイル・ブロック住宅は，４住宅とも，平面・断面構成ともに，この16インチのモデュールによって統御されている。各住宅における寸法の取り方は，原図によるとミラード邸が外法，ストーラー邸が内法，フリーマン邸とエニス邸は外法で計画されているが，平面構成はいずれの住宅においても，その３個分にあたる４フィートのモデュールに従っている。外部空間においても全ての住宅において，テラスや階段などほぼ全てが16インチのモデュールに従っており，その一貫性がうかがえる。エニス邸では，擁壁やそれを地中につなぎ止めている横梁も４フィートのモデュールを下敷きにしており，ブロックという単一の素材によって，空間全体を明確に統合する秩序への志向をみてとることができよう。

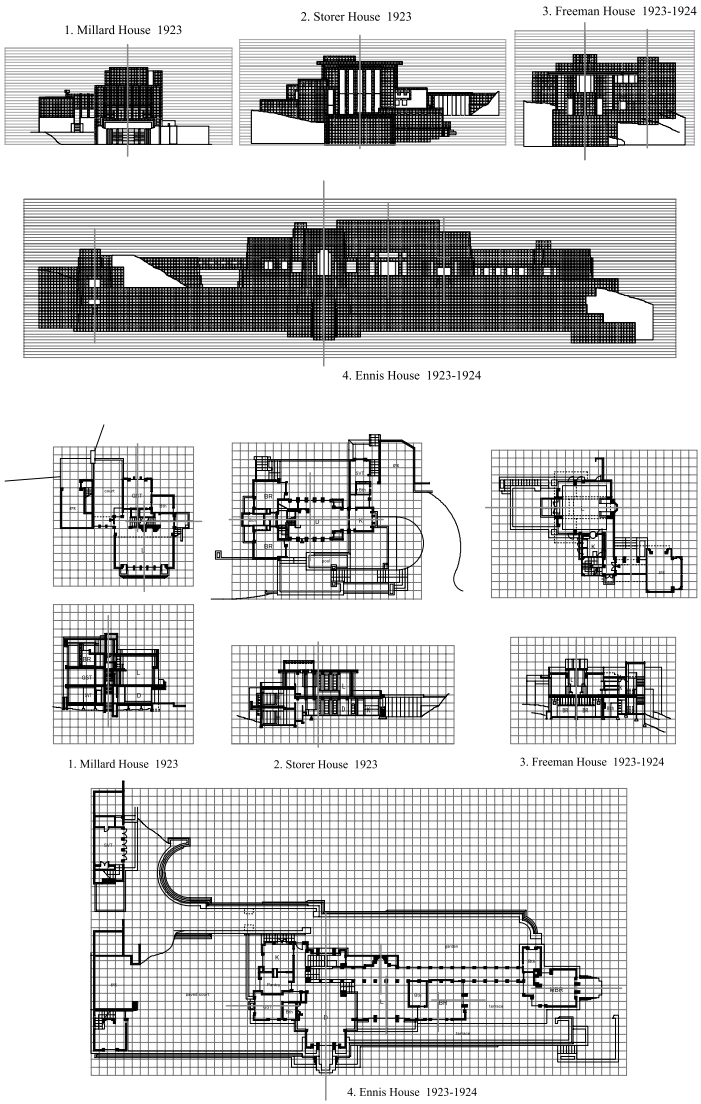



図12　立面および平面・断面におけるモデュールと軸の構成

ライトは1904年以降

のすべての作品にグリッドプランを採用した[10]とされている。後のユーソニアン・オートマティックにおいても，空間全体をこれほど統御するモデュールを用いたとは言い難く，テキスタイル・ブロック・システムほど，平面や断面の構成においてモデュールに厳密に従うものは，以降，現れることはなかったといえよう。

**2）テキスタイル・ブロックによる立面のデザインと軸の構成**：テキスタイル・ブロックによる立面デザインは，基本的に，住宅それぞれに独自の装飾が施されたテキスタイル・ブロック（ストーラ邸は３種類）と，装飾が施されていない無地のブロックを中心に構成されている。装飾が施されたタイルと無地のタイルに着目しテキスタイル・ブロック住宅の立面構成におけるそのパターンをみると，ミラード邸では単一の表情を現したブロックによる壁体は，壁それ自体の凹凸を中心に簡潔さを印象づけるものとなっており，ストーラー邸でのブロックの扱いは，ヴォリュームの端部に縁取りのように交互に用いられており，リズミカルなものとなっている。さらにフリーマン邸では大きなガラス面のあるヴォリューム中心に，端部だけでなく，ヴォリュームの中心部においても装飾のあるブロックと無地のブロックが交互に幾何学的に用いられている。これら３住宅におけるヴォリューム構成が直方体をもとにしているのに対し，エニス邸では，各ヴォリュームの端部のブロックが，上部に行くに従い，その幅を減じられることで，全体として雁行する凸型の立面を形成していることに大きな特色がある。さらに，装飾のあるブロックと無地のブロックの使い分けも，こうした雁行する凸型のヴォリュームを強化する様に，居間のヴォリュームに認められるような凸型のパターンをつくりだしている。

ついで，立面のデザインにおける対称軸の構成をみると，いずれの住宅においても，主室を包含するヴォリュームにおいて明確な軸をもつ立面デザインとなっている。全ての住宅で，主室を包含するヴォリュームが主たるヴォリュームであることに差異はないが，ストーラー邸以降では，主室のヴォリュームも南北という主立面だけでなく，東西の軸が設定され，フリーマン邸では，主室のヴォリュームと階段室のヴォリュームにも軸が設定されている。ミラード邸以降，徐々に，軸を増やしてきた結果，エニス邸では，多数の軸が設定され，その手法が豊富化していることを認めることができよう。

### ３－３．平面構成

本節では，テキスタイル・ブロック住宅の平面構成について，配置構成，外部から玄関への動線の計画，居間や食堂といった公室と寝室等の私室の構成，そして平面構成における軸という視点から分析を加える。

**1）配置および外部空間の動線計画**：ミラード邸は，道路から住宅をはさみ渓谷を臨む敷地にあることから，渓谷側の眺望を臨む住宅の主立面の背面からの導入となるが，同時に客室を道路側に配し，主立面同様のデザインを付与している。また，主屋と駐車場の間に引き込むこ

とにより，玄関と居間を隣接させ，断面的にも変化を加えてはいない。ストーラー邸は，道路から２階分を，まずテキスタイル・ブロックに囲まれた３つの直線状に配された階段を昇り，居間同様の眺望を臨むことのできるテラス状の踊り場で90度折れ曲がり，主立面にある玄関へといたる。中心的なヴォリュームとなる居間や食堂では，南側の街とともに北側の山へ臨む眺望が得られるようになっている。フリーマン邸は，街をみおろす主立面の背面から数段下がっての導入となっている。これは，背面側で接道しており，背面側から主立面側にかけて急な下がり勾配になっていることからも，壁をたてプライバシーを保持するという合理的な計画的配慮によるものと考えられる。エニス邸でも，接道部と逆側で眺望が拡がっており，ここでも背面からの導入となる。エニス邸では，接道部に上部がブリッジとなったゲートが設けられ，これをくぐりエントリー・コートに至り，90度曲がり玄関へ至り，半階上り，主階へと至る。

以上にみてきたように，テキスタイル・ブロック住宅４作品の平面構成においては，いずれも眺望を重視した構成をとっていることが明らかである。これら４題の住宅の外部における動線計画は，その敷地の特長により，背面からの導入，正面からの導入と異なるものの，玄関の前に中間領域的な空間を設け，そこで，一旦，眺望を得た上で，屈折し，玄関へと至り，さらに屈折させて主室である居間へと至らしていることにより敷地と呼応させ，眺望という敷地の特性を引出していることが共通点として認められよう。

**２）公室と私室の構成**：公室と私室の構成も，先と同様に敷地との呼応と眺望という敷地の特性を活かそうとするものである。ミラード邸では，渓谷側への眺望を重視し，食堂の上に居間を配しており。道路側に私室となる客室や寝室を，居間の吹抜と関係づけながら配し，最上階に配された主寝室は，道路側と居間上部のテラスの双方に面する様に配され，公室と私室のヴォリュームが相互に貫入するものとなっている。ストーラー邸では，街側と山側双方への眺望を有する公室のヴォリュームを挟むように私室が配され，特に寝室のヴォリュームは，公室のヴォリュームとはレベルも変えられ分離されることで，上階に配された居間では四方に眺望が望める構成となっている。フリーマン邸では，居間の下階に寝室が配され，公室と私室のヴォリュームが完全に分離されている。エニス邸においても，広大な敷地という条件もあり，特に公室群と主寝室が長いロッジアのみで接続され，公室と私室のヴォリュームが分離されている。居間に隣接する寝室も，隣接こそしているものの，傾斜した壁を有する独自のヴォリュームとなっており，ヴォリュームの分離の一形態と考えられる。

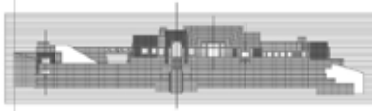
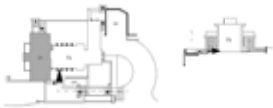
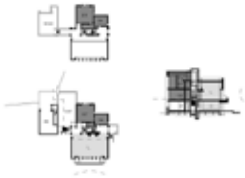
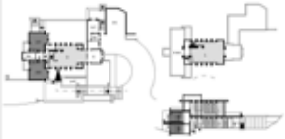
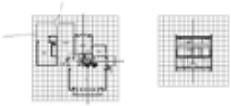
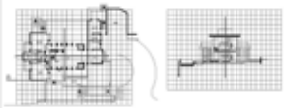
**３）平面構成における軸**：ライトは，プレーリー・ハウスを創出した第一黄金時代当初は，建築全体のヴォリュームを一本の軸で構成するシンメトリーを重視した構成を採ってきたが，徐々に，全体のヴォリュームをシンメトリーで構成することが少なくなる。しかしライトは，軸という構成原理を完全に捨象するのではなく，主室の部屋の構成には軸を導入するローカ

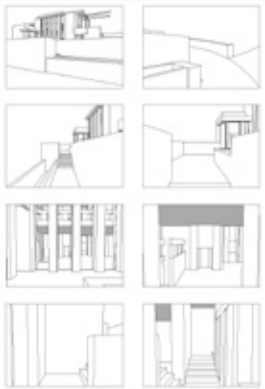
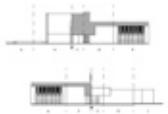
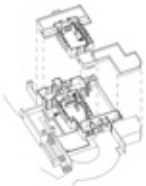
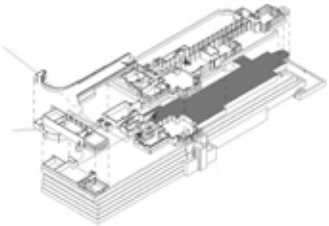
ル・シンメトリーという手法を採っていた。この手法も，後の第二黄金時代には認められなくなる。ミラード邸では，渓谷側を臨む主室のヴォリュームが全体を統御するものとなっているが，このヴォリュームに認められる明確な軸が，平面構成においても軸となっているが，暖炉とは軸がずれている。ストーラー邸においても，主室のヴォリュームに認められる明確な軸が，暖炉とはずれているものの，平面構成においても軸となっており，またこの住宅では，それと直交する軸が主室だけでなく寝室やキッチンを含む部分まで統御している。フリーマン邸では，主室を含むヴォリュームの軸が暖炉やテラスをふくむ空間全体の軸となっており，また，エントリー・コートやキッチンなど様々な部分に軸が認められることから，この住宅では一つ一つの空間に内外空間を統御する軸として用いられたものであることが認められる。エニス邸においても，フリーマン邸同様，一つ一つの空間に内部空間と外部空間を統御する様々な軸が用いられている。こうしたことから，テキスタイル・ブロック住宅においては，依然として平面構成における軸が重視されていることとともに，その手法も，全体を統御するものとしての軸から，個々の空間を統御するものへと移行していることが認められた。

### ３－４．居間空間の構成と全体の立体構成

**１）居間空間へいたるシークエンス**：外部から居間に至るシークエンスを，収集した資料から３次元ＣＧ[11]により再現し，それを一定間隔にみることでライトの空間操作を分析した。ミラード邸は，玄関と居間が同じレベルにあり，天井の低い玄関ポーチを経て，玄関を入ると右側に２層吹抜の居間があるという簡潔な導入ながらも，空間の圧迫と開放が達成されている。ストーラー邸は，玄関のレベルから１階上がって四方が開かれた居間に至るが，このシークエンスでは，暗い階段室を上階からの光に導かれるように３回屈折しており，テキスタイル・ブロック住宅の中では，複雑な操作を行っている事例となる。フリーマン邸は，ミラード邸同様，玄関と居間が同じレベルにあり，天井の低い玄関ポーチを経て，長く暗い廊下を経て，明るく拡がりのある居間へと至る。ミラード邸同様の簡潔な導入であり，玄関ポーチから廊下という圧迫される空間から，開放的な居間の空間へという操作も類似するものである。エニス邸では，天井の低い玄関ポーチから暗い玄関へと至り，上階からの光に導かれて屈折し，１層上がって主階に至る。主階では，様々な高さの腰壁とともに，柱を４フィート・グリッドの交点に配したロッジア状の廊下を経て居間へと至る複雑な操作が行われており，この住宅でも，暗く圧迫される空間から，明るく開放的な空間へと展開するよう操作されている。

**２）居間空間の構成**：居間空間の構成をそのヴォリュームの構成と開口の採り方とともにみると，ミラード邸では，居間の吹抜空間を中心に空間の貫入がなされ，居間の正面の壁面において，上半分を有孔ブロックによって構成し採光を行っている。この採光は，居間に印象的な光を導入するだけでなく，寝室から出てすぐの室内バルコニーの部分においても側面側の窓と

| | | ミラード邸 | ストーラー邸 | フリーマン邸 | エニス邸 |
|---|---|---|---|---|---|
| 空間構成材 | 構造体 | テキスタイル・ブロック | | | |
| | 天井 | 木材 | | | |
| | 層間の床 | セメントタイル | 木材 | 木材<br>一部セメントタイル | |
| モジュール | 平面モデュール | 16インチ | | | |
| | | | 4フィートに厳密にのる | | 4フィートに部分的にのる |
| | 立面デザインと軸の構成 | 動線 | 規様の配置によるリズム | 規様の配置の幾何学性による装飾 | 蛇行する壁による複雑な形態 |
| | | | | |  |
| 諸室の構成 | 外部の動線計画 | 背面からの導入 | 正面からの導入 | 背面からの導入 | |
| | | |  | | |
| | 公室・私室の構成 | ヴォリュームの貫入 | 分離 | | |
| | |  |  | | |
| | 開口の主体 | 主庭 | 暖炉 | | |
| | 軸の構成 | 暖炉による偏心 | | 1つの空間の上で内外を統御 | |
| | |  |  | | |

| | | ミラード邸 | ストーラー邸 | フリーマン邸 | エニス邸 |
|---|---|---|---|---|---|
| 立体構成 | 居間に至るシークエンス変化 | 簡潔な導入 | 内部での複雑な操作 | 簡潔な導入 | 内部での複雑な操作 |
| | | 圧迫と開放 | 暗と明 | 圧迫と開放 | 暗と明 |
| | | |  | | |
| | 動線空間の立面 |  | | | |
| | 全体のヴォリュームと居間の構成 | 空間が貫入するヴォイド | 簡潔なヴォイド | 天井の形態による複雑化 | 貫入する空間における流動性の獲得 |
| | | 十字形態の余韻を残す | 簡潔なヴォリュームの貫入 | | 様々なヴォリュームの貫入 |
| | | |  | |  |

ともに採光をもたらしている。スキップ・フロアでの新たな空間の構成を採るストーラー邸では，すべての空間を結ぶ階段が全体の中心を成し，居間空間の構成そのものは簡潔なものとなっている。また前面と背面が同じ形態の大開口となっていることにより居間全体が光に包まれている。フリーマン邸では，居間空間は平面形状こそ簡潔な長方形をなしているが，天井の形態に様々な操作が加えられ，そこでは有孔ブロックを使った印象的な採光が行われている。そのフリーマン邸の居間の前方約半分は，コーナー部分も含めてガラスの壁によって占められている。後の落水荘でもみられるガラス自体を留にして接ぐ方法は，この作品で初めて用いられたものである。また居間の床材は，外周部のブロック1.5個分をセメント・タイルを敷き，中央部ではオーク材を敷いている。これらの手法のため部屋の隅部近くでは，内部空間の外部への伸張，外部空間の内部への侵入が引き起こされ空間の連続性を示唆している。エニス邸では，様々な空間が相互に貫入しながら連続性を獲得するものとなっており，特に，この住宅においては，食堂が居間から数段階段を上がった位置にあり，より大きなヴォリュームをもつことで，居間やロッジアまでが一体となる流動的な空間の核となっており，食堂が公室の空間としても中心的な存在であることが認められる。

3）**全体の立体構成**：居間を中心とする内部空間の空間構成の体系を明らかにするために，全体の立体構成に関する分析を行った。4住宅の住宅は眺望を含め，その開口の方向に全体の構成を決定する重要な視点が置かれていることが改めて明らかとなった。ミラード邸では，プレーリー・ハウスにみられる十字型の形態が継承されているが，ストーラー邸やフリーマン邸では，いくつかのヴォリュームが相互に貫入するようになり，エニス邸では，多数のヴォリュームが貫入するようになる。彼が1910年代まで数多くの作品を手がけていたシカゴとは異なり，ロサンゼルスでは，前面の道路に対する意識はあまり高くはない。さらに敷地の持つ条件が，山麓部の斜面地で眺望に優れるものであり，その敷地に固有の建築を残そうとするライトは，それらを重んじ反映させたものと解される。

## 4．プレーリー・ハウスおよびユーソニアン・ハウスの空間構成との比較検討（図13）

この章では，以上にみてきたテキスタイル・ブロック住宅の空間構成の特徴をみるため，プレーリー・ハウスの空間構成の特長については，その完成形とみなされているウィリッツ邸（1902）およびロビー邸（1909），ユーソニアン・ハウスについては落水荘（1936）およびジェイコブス邸（1937）にもとめ，テキスタイル・ブロックの空間構成との比較を行う。

平面計画では，プレーリー・ハウスが，十字形の平面をとり，暖炉の量塊を中心，その周囲に対称性の強い空間が配され，居間と食堂はそれぞれ別にウィングを形成し，中央の暖炉で曖昧に接続されているが，テキスタイル・ブロック住宅では，暖炉が全体構成の中心ではなくなり，また居間と食堂は接続しているものと分離しているものに分かれる。ユーソニアン・ハウ

スでは，前と後の方向性が明確化され，食堂は，居間の一部のアルコーブ状の空間に設けられている。外部における動線計画では，プレーリー・ハウスが，外壁に沿わせて迂回させるように導入させるのに対して，テキスタイル・ブロック住宅では，住宅のヴォリュームと車庫のそれとの間に中間領域的で天井の低い空間を経るように計画されている。そしてユーソニアン・ハウスでは，壁に沿わせてアプローチさせるものとともに，居間の正面から導入するものもある。開口のとり方も，変容している。プレーリー・ハウスが四方に対し開口を設けているのに対し，テキスタイル・ブロック住宅では眺望を特化させる様に開口を設け，ユーソニアン・ハウスでは，床から天井までを覆う大開口が設けられるようになる。全体のヴォリュームの構成については，プレーリー・ハウスでは，道路に沿うヴォリュームは１層，直交するヴォリュームは２層としているのに対し，テキスタイル・ブロック住宅では，ほぼ２層のヴォリュームを，眺望とともに敷地の勾配を配慮して配置している。ユーソニアン・ハウスでは，眺望を重視している点は，テキスタイル・ブロック住宅の構成を継承するものであるが，屋根や床のスラブを面として独立させマッスとしての輪郭を消している点に差異が認められる。木造の構造にプラスターやスタッコで仕上げられていたプレーリー・ハウスでは内外の床の仕上げも異なっているが，テキスタイル・ブロックの構造壁がそのまま仕上げとなるテキスタイル・ブロック住宅では，内外の床仕上げを一致させる傾向にあり，構造体を仕上げとしたユーソニアン・ハウスでは，内外の床の仕上げを一致させる傾向がより強くなる。従来テキスタイル・ブロックの使用という観点からの指摘が多かったテキスタイル・ブロック住宅であるが，その空間構成はプレーリー・

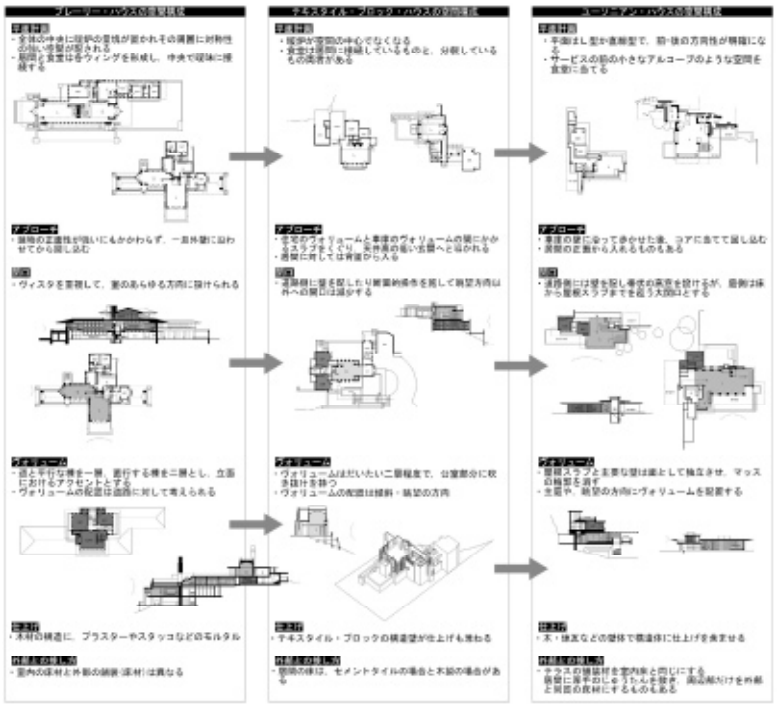



図13　プレーリー・ハウスおよびユーソニアン・ハウスとの比較

ハウスからユーソニアン・ハウスへの移行の中間的段階をとっていることが認められよう。

## 5．ま と め

本稿ではテキスタイル・ブロック住宅の空間構成について，空間構成材，モデュール，平面構成，軸による統御，居間の空間構成と全体の立体構成という観点からその特性をみてきた。以下に本稿で明らかとなった諸点を述べる。テキスタイル・ブロックは，高度な技術を必要とはせず，現場で製作されたブロックで住宅全体を造り上げる工法であり，それぞれの住宅固有の装飾が素材に新たな魅力を付与し構造と装飾の一体化をなし得たものである。モデュールは，内外問わずテキスタイル・ブロックの16インチのモデュールによって統御されており，さらに４フィートのモデュールの存在も認められた。立面のデザインにおける軸による統御では，主ヴォリュームにローカル・シンメトリーを採用する特徴が認められたが，徐々に複雑化する傾向もみられる。平面構成ならびに居間の空間構成や立体構成については，住宅と車庫はそれぞれ別のヴォリュームとし，それをスラブやブリッジで結び，その間の中間領域に玄関を配していること，平面的に空間を統制する軸は徐々に複数になり，１本１本の軸の意味付けは弱くなっていくこと，公室と私室は基本的にヴォリュームを分離されるが，その程度こそ違うものの空間の繋がりを持つこと，さらに，居間は他の空間よりも天井が高く，動線空間などと連続し空間を伸張させていることなどが認められた。外部から居間に至るシークエンスについては，空間自体のヴォリュームや，光の採り入れ方によって圧迫（暗）から開放（明）へと誘導する一連の流れを生み出し，そのための操作は徐々に複合化し，敷地が持つ眺望などの条件とあいまってより複雑になっていく。この結果，内外ともに敷地の特性をいかした流動性のより高い空間が創出され，３次元的な空間の効果もありヴォリュームがより複雑に貫入する空間が創出されている。さらに，これらテキスタイル・ブロック住宅の空間構成は，プレーリー・ハウスからユーソニアン・ハウスへの空間構成の移行的段階であることも合わせて確認された。

### 註

1　ロサンゼルスの近代建築に関して，空間構成の観点から検討を加えた主な論考を下記に示す。
末包伸吾：ルドルフ・シンドラーの住宅建築における空間構成材とモデュールによる空間構成法，日本建築学会計画系論文集，no. 494，pp. 261-267，1997.04.，末包伸吾：部屋の構成とシークエンス計画にみるルドルフ・シンドラーの空間構成法，日本建築学会計画系論文集，no. 497，pp. 221-227，1997.07.，末包伸吾：ルドルフ・シンドラーの住宅建築にみる空間構成の類型とその移行，日本建築学会計画系論文集，no. 518，pp. 321-328，1999.04.，末包伸吾：リチャード・ノイトラの住宅作品における空間構成材とモデュールによる空間構成法，日本建築学会計画系論文集，no. 521，pp. 277-283，1999.07.，末包伸吾：配置計画および平面計画にみるリチャード・ノイトラの住宅作品

の空間構成，デザイン理論，no. 51，pp. 17–30，2007.11.，Shingo SUEKANE: A Study on the integration of the Prefabrication and the Locality of Case Study Houses，Proc. of 4th international symposium on architectural interchange in Asia, pp. 633–38, 2002.09.，末包伸吾：主題とその構成にみる建築家ルドルフ・シンドラーの論考の特質とその変遷，日本建築学会計画系論文集，no. 627，2008.05（印刷中）

2　谷川正己，フランク・ロイド・ライト，鹿島出版会，1967。

3　Anthony Alofsin: Frank Lloyd Wright The Lost Years, Univ. of Chicago Press, 1993。

4　谷川正己，前掲書，pp. 111–129。

5　フランク・ロイド・ライト，樋口清訳：自伝，中央公論美術出版，1988，p. 335。

6　ケネス・フランプトンが『テクトニック・カルチャー（松畑他訳，TOTO 出版，2002）』で指摘するように，ライトのコンクリート・ブロック造の住宅は1929年にオクラホマに建設されたリチャード・ジョーンズ邸が最後のものである。ジョーンズ邸は，ロサンゼルスに建設されたものではないことから，ロサンゼルスにおける近代建築の形成過程の把握を企図する本稿において分析対象とすることに適していない。さらにフランプトンが指摘するように，ショーンズ邸は，テキスタイル・ブロック特有の幾何学的装飾が用いられることもなく，また，構造方式や構成形態に変化があり過渡期的な作品として位置づけられていることから，本稿においてテキスタイル・ブロック住宅の特性をプレーリー・スタイルやユーソニアン・ハウスとの比較検討を行うこともあり，分析対象とはしていない。

7　現地調査は，1995年，1997年，1999年，2004年，2007年の各年度にそれぞれ２週間程度で行った。ミラード邸およびフリーマン邸は，ノースリッジ地震等の補修がなされている中での調査となり，からの目視調査にとどまる。ストーラー邸は居住者から内部空間の撮影の許可が得られなかった。こうした状況からゲッティ，およびライト・ファウンデーションで収集した原図面および，註と参考文献に示す文献から，内部空間の状況の把握に努めた。

8　ミラード邸では，鉄筋が用いられず，ブロック一段ごとにトロをつめて積む方法を採用している。

9　ここでの天井や床の仕上げについては，後の改修などもあるため，ライト・ファウンデーション等から資料として収集したライトの設計時の実施設計図面における表記に基づく。

10　Edward R. Ford，八木幸二訳：巨匠達のディテール　vol. 1，丸善株式会社，1999，p. 329。

11　註７に示すように，内部空間の写真撮影はエニス邸を除いては不可能であったため，こうしたＣＧによる再現の手法をとったが，同時に，参考文献に示す資料で補完している。なお，本稿の９ページ目に示す図はその代表的なものに限定している。

**図版出典**（以下に示すもの以外は，全て筆者撮影もしくは作成）

図４：David Gebhard: Romanza, Chronicle Books, San Francisco, 1988, p. 19。　図５：ウィリアム・ストーラー，岸田省吾監訳：フランク・ロイド・ライト全作品，丸善，2000, p. 217。　図７：David Gebhard: ibid, p. 31。　図８：ウィリアム・ストーラー，岸田省吾監訳：前掲書，p. 221。　図９：Scot Zimmerman and Judith Dunham: Details of Frank Lloyd Wright, The California Works, Chronicle Books, San Francisco, 1994, p. 59.

**主な参考文献**（邦訳があるものは邦訳を示す）

Frank Lloyd Wright, Bruce Brooks Pfeiffer ed.: Frank Lloyd Wright Collected Writings vo. 1–5, Rizzoli, N.Y. Allen H. Brooks: Wright and the Destruction of the Box, Journal of the Soc. of Arch. Historians, No. 38. 1979. Edgar Tafel: Apprentice to Genius Years with Frank Lloyd Wright, McGraw-Hill, Inc. 1979. フランク・ロイド・ライト，谷川正己・谷川睦子訳：ライトの遺言，彰国社，1966. 谷川正己：フランク・ロイド・ライト，鹿島出版会，1967. フランク・ロイド・ライト，遠藤楽訳：ライトの住宅，彰国社，1967. フランク・ロイド・ライト，谷川正己訳：ライトの都市論，彰国社，1968. フランク・ロイド・ライト，エドガー・カウフマン，ベン・レーバン，谷川正己・谷川睦子訳：フランク・ロイド・ライト　建築の理念，ADA，1976. オルギヴァンナ・ロイド・ライト，遠藤楽訳：ライトの生涯，彰国社，1977. フランク・ロイド・ライト，谷川睦子・谷川正己訳：建築について，鹿島出版会，1980. 二川幸夫，Ｂ・Ｂ・ファフィファー，安藤正雄訳：フランク・ロイド・ライト全集，ADA，1991. Grant Hildebrand: The Wright Space, Univ. of Washington Press, Seattle, 1991. Kathryn Smith: Hollyhook House and Olive Hill, Rizzoli, 1992. Anthony Alofsin: Frank Lloyd Wright The Lost Years, 1910–1922, Univ. of Chicago Press, 1993. エドガー・ターフェル，谷川正己・谷川睦子訳：知られざるフランク・ロイド・ライト，鹿島出版会，1992. Robert Sweeny: Wright in Hollywood, MIT Press, Cambridge, 1993. テレンス・ライリー，ピーター・リード，京都大学工学部建築学教室内井研究室訳：建築家フランク・ロイド・ライト，デルファイ研究所，1995. 二川幸夫，B・B・ファイファー，玉井一匡訳：フランク・ロイド・ライトの住宅，ADA，1996. Edward R. Ford，八木幸二訳：巨匠達のディテール　1879–1948，丸善株式会社，1999。フランク・ロイド・ライト，樋口清訳：ライト自伝 ある芸術の展開，中央公論美術出版，2000. 三沢浩：フランク・ロイド・ライトのモダニズム，彰国社，2001. 谷川正己：フランク・ロイド・ライトとはだれか，王国社，2001. 富岡義人：建築巡礼48　フランク・ロイド・ライト，丸善，2001. Wiliam Allin Storrer，岸田省吾監訳：フランク・ロイド・ライト全作品，丸善，2000. Bruce Brooks Pfeiffer: FRANK LLOYD WRIGHT, TASCHEN, 2004. 明石信道：フランク・ロイド・ライトの帝国ホテル，建築資料研究社，2004. 谷川正己：フランク・ロイド・ライトの日本，光文社，2004. Robert MacCarter: On and By Frank Lloyd Wright, A Primer of Architectural Principles, Phaidon, 2005. マーゴ・スタイプ，隈研吾監修：フランク・ロイド・ライト・ポートフォリオ，講談社，2007.